

■ 学生は大学ノートを知らない？

「大学ノートの『大学』をトルにしてはどうですか？」とのアドバイスを受けた。私が執筆する雑誌原稿などの校正アルバイトをしている若者からだ。

作家志望の大学生なのだが、まさに大学生から大学ノートに関する指摘を受けたところがびっくりぼん！ 単なるおやじギャグなら笑えるが、そうではなかった。

「ノートにラインを引いて、自分の長所と短所を左右に書き分けてみよう」

雑誌のインタビューの中で私はこう語った。ライターが構成した文章は「大学ノート」になっていたが、私も担当編集者もデスクも朱筆を入れなかった。この言葉に違和感を覚えなかったからである。にもかかわらず、大学生が首をかしげた。20代の読者はこの言葉になじみがないだろうと。

ビジネス分野の原稿のチェックに大学生を起用することは、ふつうに考えればほとんど意味がない。それは私も承知のうえである。にもかかわらず起用しているのは、ビジネスパーソンとは異なった視点からの指摘が、年に一度か二度くらいあるかもしれないと考えてのことだ。

出版社にはプロの編集者やライターがいるのだから、一般的な校正や校閲レベルのことではまず問題は起きない。起きるとしたら、なにげなく見逃してしまうレベルの事柄なのである。今回の例などもその一つといえるだろう。

ついでながら、ネットで検索すると「大学ノート」という言葉はりっぱに存在している。楽天市場で購入することもできる。ただし若い世代はすでにこの言葉を使わない。それを30代より上は知らないということなのだ。

人事コンサルタント 本田 有明

■ 課題発見力が発揮されるとき

「出版契約書に書いてある内容がわからないのですが……」と新入社員が言った。自社で使用している契約書を目にした感想だ。契約書体とでもいうべき古めかしい文体と文字遣いで書かれている文章の意味が、若者にはさっぱりわからなかったのだ。

聞いた先輩たちは一笑に付した。「少しずつ業界の常識を勉強しなさい」と。

「でも契約書を交わす相手には若い人もいますよね？」と彼は食い下がった。「だったら若い人にもわかるような文章にしたほうが親切ではないでしょうか」

多くの先輩はフンと鼻を鳴らしたが、なるほどとうなずいた者がいた。

「一理ある意見だ。ではどんなふうに変えたらいいか、君も考えてくれ」

そう言われて新人は発奮した。他社の同期入社組と情報交換をして、短期間で新しい契約書のひな型を作った。私が社会人になりたてのころの友人のエピソードだ。

業界の常識だけでなく社会の常識というものもまだ備わっていない者には、一つだけ先輩たちを凌駕する強みがある。素朴な問題意識というやつだ。「社会人基礎力」の用語を使うなら課題発見力である。

ただし若者がそれを発揮すると、たいていの先輩たちはイラッとした顔になる。

「なぜこの仕事をしなければならないのですか」といったように、これまでのやり方に疑問を投げかける形になるからだ。それは旧来の方式に従ってきた世代には一種の謀反とも映る。物事の変革には、多くの場合そのような印象が付きまとうものだ。

イラッとしたところに新しい芽が潜んでいる。そう考えられる鷹揚さがあるかどうか。年長者の器量が問われるところである。